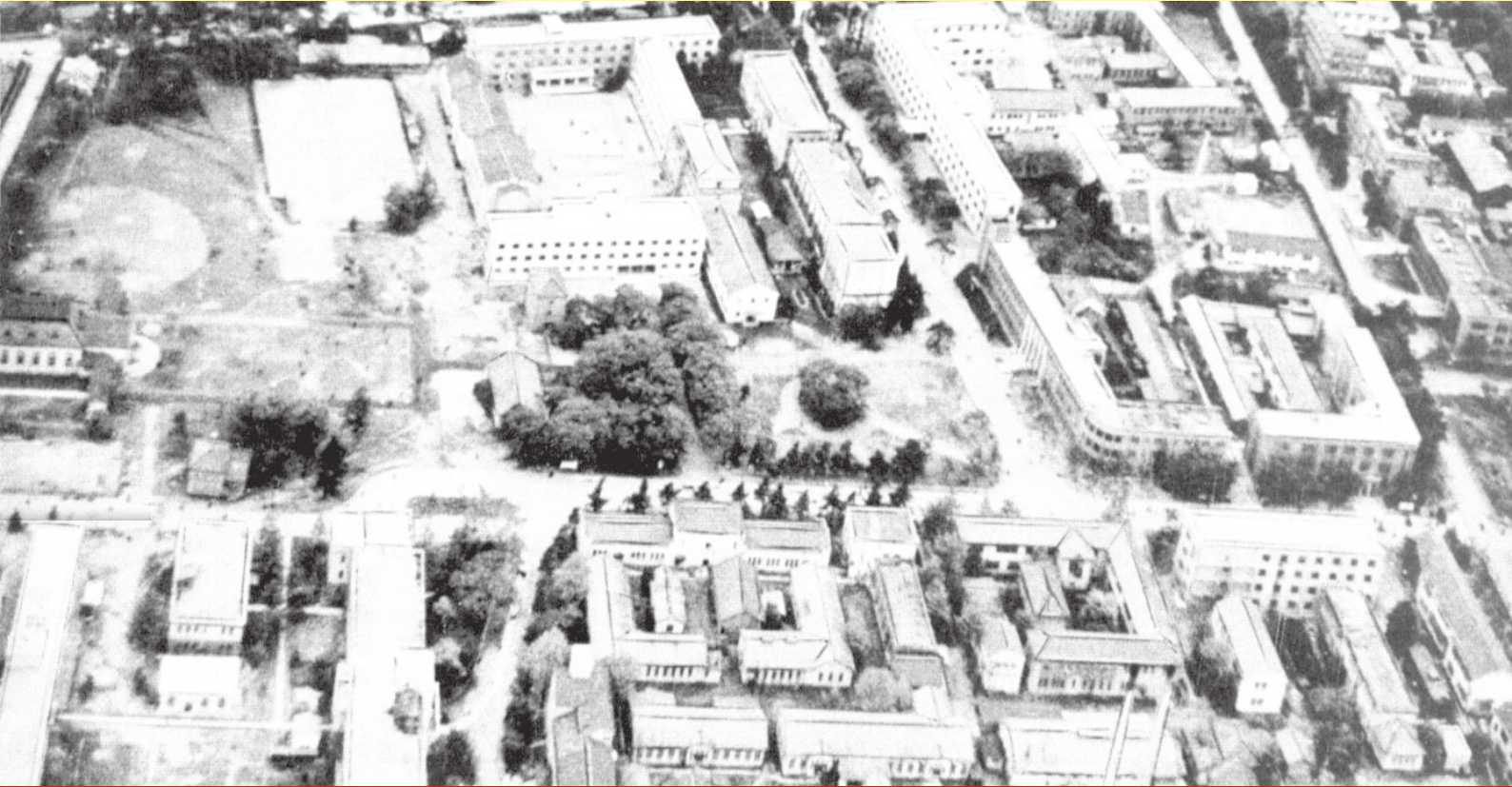




東北大学史料館 だより

No.27
2017 Sep.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



写真：1957年（昭和32年）5月撮影片平地区航空写真（東から）／「東北帝国大学創立50周年絵葉書」より

変わりゆく片平キャンパス

2017年（平成29年）、東北大学は創立110周年を迎えました。東北大学とともに歴史を刻んできた片平キャンパスでは、近年、施設の新築や改修が行われて景観が大きく変わりました。

1996年、「東北大学新キャンパス構想」が公表されて以降、市民有志による歴史的建造物の保全運動をはじめ、片平キャンパスのあり方が議論されてきました。土地の売却のため一部の施設が青葉山新キャンパスに移転することとなりましたが、2008年に発表された「片平キャンパスマスタープラン」に基づき、利便性を活かしたエクステンション教育の展開、市民交流の場の創出、物質材料関係分野の国際研究拠点の構築を目指した整備が行われることとなりました。

それにより、歴史的建造物の保全と調和を図った建造物の新築、改修が進められることになりました。北門に隣接してあった、かつての工学部金属工学科教室は、スクラッチタイルの外壁を保存、再生しつつ、AIMR本館に姿を変え、旧本部棟の跡地には、新たにエクステンション教育棟が建造されました。

2017年5月、片平キャンパス地区が平成29年度都市景観大賞「都市空間部門」特別賞（「都市景観の日」実行委員会主催）を受賞しました。これは歴史的建造物と新規建築物、緑豊かなオープンスペースが一体となった景観が形成されており、今後の大学キャンパスの保全・再生・活用のモデルとなり得ることなどが評価されたことによります。また、歴史的建造物については、2017年7月、文化財収蔵庫（明治43年竣工、旧第二高等学校書庫）、魯迅の階段教室（明治37年竣工、旧仙台医学専門学校六号教室）、本部棟3（明治37年竣工、旧医専博物・理化学教室）、本部棟1（昭和2年～9年竣工、旧理学部化学教室）、史料館（大正15年竣工、旧附属図書館）が登録有形文化財に答申されました。

これからも時代の流れの中で片平キャンパスの景観は変化していくことでしょう。建造物の歴史に思いを馳せ、片平キャンパスを散策してみたいかがでしょうか。

Index

- 2 史料館がとりむすぶ縁
東北大学史料館長 柳原敏昭
- 4 土井晩翠「星落秋風
五丈原」の漢訳について
西安交通大学教授 金中
- 6 資料の公開について
史料館のうごき
- 8 お知らせ
・秋の土日開館
・企画展
・片平まつり2017

史料館がとりむすぶ縁 —館長就任のごあいさつにかえて—

東北大学史料館長 柳原敏昭



2013年4月4日、スイス在住のピアニスト、大島妙子さんがご夫君とともに東北大学を訪問されました。大島さんはスイスを拠点にヨーロッパと日本でコンサート活動を展開されるとともに、バーゼル音楽アカデミー、ベルン音楽院で教鞭を執ってこられた方です。また、ご夫君のフェレンツ

・セドラークさんはハンガリー出身のチェリストです。映画『タイタニック』(1997年)で、沈没間際まで演奏を続けた弦楽四重奏団の一員と言え、わかっていただける方もいらっしゃるかもしれません。

このように国際的に活躍される音楽家ご夫妻が、なぜ本学を訪問されたのでしょうか。演奏のためでしょうか。特別講義のためでしょうか。実は、東北大学史料館所蔵の資料をご覧になるためだったのです。

史料館には、大島正隆文書と名付けられた一群の資料があります。大島正隆(1909-44)は戦前の卒業生で、法文学部の副手もつとめた東北地方の歴史研究の開拓者です。大島妙子さんは、正隆の弟・正泰のご息女ですから正隆の姪にあたります。

大島正泰(1919-2011)は、戦前に東京音楽学校(現在の東京芸術大学音楽学部)を卒業し、戦後は桐朋学園大学のピアノ科教授として幾多の名ピアニストを育てました。演奏面では、とくに室内楽や歌曲の伴奏で高く評価されています。

大島正隆文書の主要部分は研究活動にかかわるものです。しかし、正隆が実家に送った書簡が100通以上含まれ、その中には正泰にあてたものも多数あります。ご夫妻はそれをご覧になりたいとわざわざお越しになったのです。

書簡をふたつ紹介しましょう(／は原文での改行を示す。新漢字・新仮名遣いに直した)。両方とも2012年春に有志(私もその一人)で刊行した『東北中世史の開拓者 大島正隆資料集』(文学研究科)に収められています。

初ステージどうかしっかりやって下さい。立派な成果を信じて居ます。心配無用のことです。／但し一切聴衆を念頭におかぬこと。自分を実際の力よりもっとよく表現しその様に人から聴いてもらおうなどという考えは毛頭あるべからず。人を見ずにピアノだけを見て、自分の真実あるがままを、それから考えた通りの真実をシューマンに表現するまででしょう。(年月日未詳の正泰あて正隆書簡)

御依頼のメトロノーム、仙台中を探したけれど、すでに手遅れでした。何処へ行っても、「とっくに無いのが当り前」、と云う様な顔^(ママ)してるには驚ろいた。製造禁止だなんて本当かしら。それでは音楽家も大変だね。(1943年4月6日の正泰あて正隆書簡)

いずれにも弟に対する兄の愛情がにじみ出ています。後者からは、音楽家を取り巻く戦時下のきびしい状況を垣間見ることができます。

2013年4月はあいにく史料館が震災復旧の工事中で、書簡の閲覧は附属図書館本館で行われました。史料館のスタッフと前出の『大島正隆資料集』執筆者が立ち会う中、妙子さんとセドラークさんは、感慨深そうに、まだ音楽家の卵だった時代のお父様に関する書簡をご覧になられたのでした。

話は変わって2013年12月2日、京都から一人のご婦人が史料館にみえられました。目的は、お姉様である川崎七瀬という帝国大学時代の女子学生の学生原簿の閲覧です。学生原簿は、学生一人一人の生年月日、入学・卒業年、賞罰、家庭状況などを記した台帳です。史料館には、帝国大学時代以来のものが保存されています。

東北大学が女性に門戸を開いた最初の帝国大学であることはいうまでもありません。川崎もその恩恵にあずかった一人ということになります。しかし、川崎の運命はあまりにも苛酷でした。

1941年、アジア・太平洋戦争開戦の年に法文学部文科に入学した彼女は、まもなく経済科に移り、社会科学を学びたいという初心を貫こうと、ある研究会に参加します。それはマルクスやマルクス主義の文献を輪読する会でした。当時、マルクス主義文献は国禁の書で、まして研究会などを開いていることが発覚すれば治安維持法によって検挙されるおそれがありました。それが間もなく現実となります。1942年6月、川崎は男子学生5名とともに特高によって拘引されます。帝大時代の本学にも、また戦前に女性の入学が認められていた北大・九大にも、他に治安維持法で検挙された女子学生はいません。川崎七瀬は、同法違反で検挙された唯一の女子帝大生だったのです。

それから一年半余り川崎は囚われの身となります。1943年4月に起訴されたことにより、退学処分も受けます。何よりも彼女にとってショックだったのは、このことだったと言います。裁判で刑の執行猶予が決まり釈放されたのは、1943年11月のことでした。

敗戦後、川崎は東京大学に再入学し（同大の女子入学生第1号）、経済学研究者の道を歩みます。1947年に書かれた手記を読むと、彼女は仙台を嫌いになったわけではないようです。そのことがせめてもの救いです。

今は焼けてしまったが、仙台の町は美しかった。町の大きさに比して古い煉瓦作りの教会などが数多くあり、私が下宿していたある没落旧家の高い二階の窓から見えるカトリック教会からはよくラテン語の讚美歌が漂って来た。杜の都といわれるだけに樹が多く、大学の殆ど構内といえる程近く、南に八木山という岡がつづいており、市中の公園として美しい木立のある散歩道を持っている。

（「私の学生生活」『大学』1-4。新仮名遣いに直した）

私が川崎のことを知ったのは、『東北大学百年史』第1巻（2007年）を分担執筆した時のことでした。同書では詳しく追究できませんでしたが、その後、彼女の足跡を追っているうちに妹さんの面識を得、仙台にもお出でいただくことになったのです。

さて、学生原簿閲覧の場面です。史料館スタッフによって分厚い冊子がもってこられ、川崎七瀬の部分が開けられると、入学当初の写真が貼り付けてありました。実は、川崎は2012年1月に92歳で亡くなっていました。その最期を看取って間もない妹さんが、20代前半のお姉様の写真と対面される。忘れえぬ瞬間でした。

申し遅れましたが、本年4月から八鍬友広先生の後任として史料館長をつとめることになりました文学研究科の柳原と申します。ここでは私のささやかな経験によるものに過ぎませんが、史料館を媒介とする縁が現在と過去、大学の内と外、日本の東西、世界の東西という風につながっていく様を述べました。史料館の使命の第一は、教育研究機関としての大学の記録を保存・整理・公開して後世の検証にそなえることです。それとともに大学という場で学び、教え、働いた人々の記録をのこすことです。必然的に、直接・間接を問わず大学にかかわった人々の様々な記録が集積されることとなります。それによって取り結ばれる縁は、無限といってよいでしょう。みなさまもぜひ史料館に足を運んでみてください。展示室で、あるいは閲覧室で、思いもかけない縁との出会いが待っているはずです。

土井晩翠「星落秋風五丈原」の漢訳について

西安交通大学日本語科教授 金 中



1、「星落秋風五丈原」に出会った経緯

土井晩翠の「星落秋風五丈原」は、気品高い漢文調で、中国三国時代の諸葛孔明の忠義心を熱く詠いあげた、氣勢壮大な作品である。それを漢訳する機会を頂き、大変光栄に思う。今から振り返ると、私が十数年前にこの作品に出会ったのは、一種の「ご縁」、また「使命」とも言うべきものであるように思える。

私は1995年に日本に留学し、研究生として東京外国語大学で勉強したが、最初の一年は何を研究してよいか大変迷っていた。そこで中国古典文学の著名な学者である、早稲田大学文学部の松浦友久教授に試みに自己紹介の手紙を送ったところ、1996年4月、先生の研究室で面会して頂くことができた。先生のアドバイスを受け、私は和歌と中日詩歌比較を専攻することにして、その後、一定の間隔ごとに早稲田大学を訪ね、不明点を松浦先生に教えて頂いた。翌年、私は東京外国語大学の修士課程に進学し、和歌について本格的に研究するようになった。松浦先生は、私にとって正しく学術研究の導き手であった。



(写真：左筆者、右松浦友久先生)

私は平生漢詩を作っており、松浦先生に和歌の漢訳を薦められた。2001年6月、早稲田大学で行われた学会の合間に、先生から、日本詩の七五調と漢詩の七言句がリズム的に類似することを示す用例として、土井晩翠の「荒城の月」を七言漢詩に翻訳するように依頼された。私は初めて明治新体詩の漢訳に挑戦し、出来上がった訳文を松浦先生に送ったところ、評価して頂いた。その頃、先生は体調が芳しくなく、私はいつかお目にかかり、日本詩歌の漢訳について歓談することをずっと心待ちにしていたが、2002年9月、松浦先生の訃報を聞き、私は茫然とした。

告別式前夜のお別れ会で、私は松浦先生について書いた漢詩を読み上げ、先生の印象を語った。それをきっかけに清和大学の加藤阿幸先生と知り合うこととなった。加藤先生は台湾の出身で、同じく松浦先生から多大な学恩を蒙った一人である。先生によると、松浦先生の著作の中で、唯一中国語に翻訳されていないのは、『詩歌三国誌』（新潮社）であった。それは「星落秋風五丈原」という、先生が暗誦できるほどに熱愛されていた文語詩に関するものであり、その漢訳を依頼されたので、私は快諾した。加藤先生は後日、きっと、天上におられる松浦先生が私たちを出会わせたのだ、と回想している。松浦先生のお陰で、「荒城の月」に引き続き、「星落秋風五丈原」の漢訳を手掛け、晩翠にご縁を結んだことになる。

2、「星落秋風五丈原」の漢訳の誕生

「星落秋風五丈原」の漢訳は、魯迅・郭沫若ならできそうであるが、今日の中国ではもはや出来る人はいないと思われる。私が訳さなければ、この偉大な作品を中国に伝えられない。全身全霊の力を込め、原作に相応しい訳文を作り出したかった。

但し、いきなり訳すのではなく、その前に、十分に作品の内容を理解・消化し、その感情が心に沁み込ませる必要があった。そこで「星落秋風五丈原」の朗読について、アナウンサーの仁木恭子氏の個人レッスンを受けた。とにかく繰り返し声に出して読んでいるうちに、晩翠の苦心と感動を幾らか感じられるように

なった。この詩は実に長く、白楽天「長恨歌」のほぼ3倍に当り、一読するにも約20分かかる。こうした準備作業を経て、2003年に私は約2週間集中して、漢訳を一気に完成させた。

訳文は七言漢詩の形式を用い、原詩の意味との対応を保持しながら、なるべく押韻と平仄も中国古典詩の伝統に従わせ、原詩の雰囲気を再現させるように努めた。その時、私は東京外国語大学の博士課程在学中の28歳であり、ちょうど土井晩翠が明治31年に「星落秋風五丈原」を作った年齢と同じであった。ここに「使命」というものを強く感じた。

こうして私の「星落秋風五丈原」の漢訳と、加藤先生による、松浦先生の解説の中国語訳を合わせ、『詩歌三国誌』の中国語翻訳版を2005年、西安交通大学出版社から刊行することができた。

2007年、すでに帰国していた私は漢詩人の石倉秀樹氏に依頼し、「星落秋風五丈原」の漢訳を訓読してもらった。つまり、それを更に日本語に訳し返したのである。私がどのような漢詩表現を用いて「星落秋風五丈原」を訳したか、原文との微妙なニュアンスの違いまで、日本の読者はそれを見れば分るであろう。紙面の関係上、二句のみを例として挙げておく。

(原詩)	(漢訳)	(漢訳の訓読)
その三峽の道遠き	三峽透迤去路遙	さんきょうい い きょろはるか 三 峽 透 迤 として 去 路 遙 に
永安宮の夜の雨	永安宮夜雨瀟瀟	えいあんきゅう よ あめしゅうしゅう 永安宮の夜雨 瀟 瀟 たり

日本詩には「体言止め」、つまり、一句全体的が名詞的表現になることが多い。それに対し、中国詩の場合にはむしろ動詞・形容詞的表現が自然である。私は原詩に見える「道遠き」を「透迤去路遙」(透迤として去路遙に)と、「夜の雨」という体言止めを「雨瀟瀟」(雨瀟瀟たり)と訳した。漢訳の二句の最後の字の「遙」と「瀟」が押韻しており、句中の第二・四・六番目の字がそれぞれ「峽」「迤」「路」と「安」「夜」「瀟」であり、いわゆる「二四不同二六対」の平仄の規則に従っている。こうした翻訳の技法や修辞法については、拙稿「日本の新体詩に対する漢訳の試み——土井晩翠の「星落秋風五丈原」を中心に」(『中国詩文論叢』第30集、2011年)を参照していただきたい。

和歌・俳句・新体詩などの漢訳テーマについて述べた、拙著『日本詩歌翻訳論』(北京大学出版社、2014年)には、上記の論文と、「荒城の月」・「星落秋風五丈原」の漢訳及びその日本語訓読、土井晩翠の生涯と業績の紹介文を収めている。2003年からすでに10年以上経っており、もとの訳文には幾つか言葉の修正を加えた。天上におられる土井晩翠と松浦先生が、「星落秋風五丈原」の漢訳が世に出たのを知れば、きっと喜ばれるであろう。

3、「星落秋風五丈原」についての思い

土井晩翠は諸葛孔明を詠った杜甫の漢詩や『三国誌演義』を題材に「星落秋風五丈原」を作り、松浦友久先生はその中国古典の学識を駆使してこの詩を解説した。私はこの詩を漢訳し、石倉秀樹氏は更にこの漢訳を日本語に訳し返した。「星落秋風五丈原」のこうした去来の経緯は、中日両国間の文学の交流と伝承の好例ともなろう。

この詩は百年ほど前の日本では一世を風靡し、多くの青年たちが暗記できるほどであった。遺憾なことに、今日においてはこの詩を聞いたことのある人すら、少なくなっている。私は西安交通大学日本語科で担当する「日本文学史」の講義において、この詩を土井晩翠の生涯と業績の紹介文とともに学生に読ませた。晩翠のことを若い世代に知らせたいからである。

今の時代では、人間関係から文学作品に至るまで、何でも軽いような気がする。私は晩翠の詩業と、その50年間に渡るホメロスの翻訳、またその人間像は、ある種の共通した厳肅さと真面目さが貫かれていると思う。それは正に現代社会で失われようとしているものではなからうか。慌しい現代人は、「星落秋風五丈原」を最初から最後まで一読する時間と根気さえあまりないのである。

末筆であるが、今後、「星落秋風五丈原」の朗読の伴奏音楽を模索し、この詩を声に出して多くの人(現代の中国人と日本人を含めて)に伝えたい。

資料の公開について.....

◆特定歴史公文書等

2017年（平成29年）2月28日付で新たに456点の特定歴史公文書等の公開を開始しました。今回新たに公開された文書は下記の通りです。

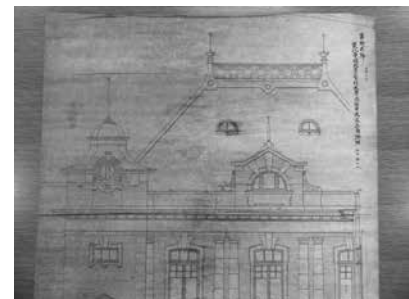
①薬学部文書

昭和36年～60年の教授会・大学院研究科委員会などの議事録。教授会については、医学部薬学科の時期のものも含まれる。



②医学部文書

大正4年～昭和62年の教授会などの議事録、中島泉次郎設計による東北帝国大学医科大学本館などの建築図面。



③補導協議会関係（教育・学生支援部学生支援課移管）

昭和36年～58年の補導協議会の議事録。

④校友会総務部関係（教育・学生支援部学生支援課移管）

平成6年～22年の校友会全学協議会などの議事録や会計書類。

◆個人・団体文書

①理学部生物学教室文書

1921年に設置された理学部生物学科および同教室を拠点に運営された東北生物学会の運営に関わる文書です。創立期以降の生物学会記録やハンスモーリッシュ関係の資料の他、戦時中の学徒勤労動員関係資料、防護当番日誌、教室の備品管理や会計処理に関わる資料などが含まれています。

②阿部純二文書

阿部純二氏は、1955年に本学法学部を卒業後、千葉大学や明治大学の教員を経て、1973年に東北大学法学部教授に就任し、1995年の退官までの間に、法学部長や全学の評議員などを務めました。1972～95年までの学内委員会の記録、報告書類や模擬裁判関係のパンフレットなどが含まれています。



史料館のうごき (2017年3月～2017年8月)

◇八鍬友広館長と永田英明准教授が退任しました (3月31日)

◇柳原敏昭館長と加藤諭准教授が着任しました (4月1日)

◇新公開資料速報展開催 (4月24日～9月15日)

整理が完了し、新たに公開された資料を紹介する新公開資料速報展の第23回「奮闘する教授会—佐藤伊久男文書—」、第24回「東北帝大の建築デザイナー・中島泉次郎—医学系研究科事務部経理課移管文書より—」を当館第2企画展示室にて開催しました。

「佐藤伊久男文書」については、展示期間中に追加寄贈がありましたので、その整理が完了次第、目録を公開する予定です。

◇川崎七瀬に関する取材・報道 (4月21日・5月19日)

「共謀罪」の報道に関連して、戦前に治安維持法で検挙された川崎七瀬について、柳原敏昭館長が取材を受けました。史料館で所蔵する学籍簿も紹介され、4月21日には朝日新聞 (宮城県版) に掲載された他、5月19日には、東日本放送Jチャンみやぎにて放送されました。

◇2017年度の法人文書の受入・評価 (5月2日～6月26日)

2016年度末に保存期間を満了した法人文書の中から本学の「特定歴史公文書」として717点 (予定外の追加移管を含む) の法人文書を当館公文書室に受け入れました。あわせて、2017年度末に保存期間を満了する予定の文書の評価を行い、移管予定となる文書を267点選定しました。引継を完了した文書については、今後、内容などに関する点検調査を行ったのち公開する予定です。

◇学都・「仙台・宮城」サイエンス・デイ2017でトークセッションを行いました (7月16日)

学都・「仙台・宮城」サイエンス・デイは大学をはじめとする教育機関や行政、企業が参加して開催される体験型・対話型の科学イベントです。今年は加藤諭准教授が「なるほど日本史・史料館～歴史も科学だ!～」と題して、パーソナリティの小川さなえ氏とのトークセッションの形で、近代史をわかりやすく解説しました。

◇史料館 (旧東北大学附属図書館) が登録有形文化財に答申されました (7月21日)

7月21日、文化審議会により、史料館をはじめとした東北大学の5つの建造物の登録有形文化財への登録について文部科学大臣に答申されました。登録有形文化財は、建設後50年を経過した建築物等の保存、活用を目的としたもので、史料館は、歴史的景観に寄与していることが評価されました。

東北大学 都市景観大賞特別賞・登録有形文化財記念

片平キャンパスの過去・現在・未来

2017年 9月29日 (金)～2017年 12月15日 (金)

関連行事

片平キャンパス建物ツアー (申込不要)

2017年 10月1日 (日)・2017年 11月3日 (金・文化の日)

10:30/13:30 各日2回 (45分程度)

※東北大学史料館までお越しください

秋の土日開館と企画展のご案内

今年も秋の土曜・日曜開館を実施します。片平キャンパス内の建造物の登録有形文化財登録と都市景観大賞「都市空間部門」特別賞の受賞を記念した企画展などを開催します。ぜひ足をお運びください。

●土曜・日曜開館実施期間 **2017年9月30日(土)~11月5日(日)**

※土曜・日曜の開館時間は午前10時~午後4時30分です。10月9日(月・体育の日)、11月3日(金・文化の日)も開館します。

●東北大学 都市景観大賞特別賞・登録有形文化財記念

片平キャンパスの過去・現在・未来 2017年9月29日(金)~2017年12月15日(金)

※2017年11月11日(土)以降の土・日曜、祝日、年末年始は休館
開館時間：10:00~17:00 入場無料
協賛：東北大学キャンパスデザイン室、仙台市



東北大学発祥の地である片平キャンパスは、魯迅の階段教室や史料館など、登録有形文化財に答申された歴史的建造物を活かしたキャンパス整備により、平成29年度都市景観大賞特別賞を受賞しました。今回の企画展では建造物に注目して、さまざまな資料とともに、片平キャンパスの歴史を紹介します。関連行事として建物ツアーも開催します。詳細は7ページを御参照下さい。



●東北大学附置研究所等一般公開

片平まつり2017

史料館テーマ：

「たてもの たんけん しりょうかん」 2017.10/7(土)・8(日) 10:00~16:00

体験コーナー〔めざせ!東北大学歴史博士/むかしの学生に変身/マシン・ポート体験〕

片平キャンパス歴史散歩(先着30名) 10/8(日) 10:30~12:00

東北大学史料館だより 第27号 2017年9月14日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 TEL 022-217-5040

E-mail desk-tua@grp.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/> Twitter @T_U_Archives